

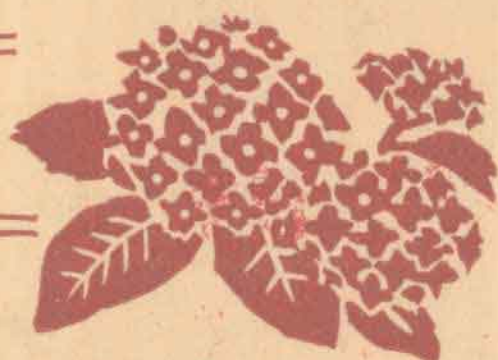


角川文庫

—3337—

人形はなぜ殺される

高木彬光



角川書店



昭和四十九年八月三十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

人形はなぜ
殺される



著者 高木彬光
たかぎ あきみつ

発行者 角川源義
かくがわ げんぎ

印刷者 村沢達弘
むらざわ たつひろ
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
郵便一〇二二 振東京一九五二〇八

株式会社 角川書店
かどがわ しょうてん
電話東京 〇七二二（大代表）

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

旭印刷・本間製本

0193-133807-0946(0)

人形はなぜ殺される

高 木 彬 光

角 川 文 庫

3337

目次

序奏

第一幕 断頭台の女王

二

第二幕 月光狂奏曲

一三

第三幕 黒いミサの犠牲

一九五

読者諸君への挑戦

三〇四

第四幕 人形死すべし

三〇九

解説

小泉喜美子 三七六

序 奏

この奇怪な連続殺人事件の物語の筆をとるにあたって、私はまず、一見異様と思われるこの題名について、一言おことわりしておかねばならないような気がする。

それだけでなく、推理作家というものは、往々にして、文章が無神経であるとか、形容詞がどぎつすぎるといふ非難を受けがちなものだ。何かといえは「血も凍る」「せいさん凄惨奇怪な」「恐怖に満ちた」「背筋も冷くなるような」「血なまぐさい戦慄せんりつの光景」が一行おきにとび出してくるなどという悪口をよくいわれがちなものなのである。

そういう論者にいわせれば、この物語などは、まず真先に題名から、批判の的になるであろう。人形というものは、たとえどれほど精妙しやうせうにつくられていたところで、一見、生きた人間と寸分たがわぬ容貌ようぼうを持っていたところで、所詮血しよせんの通わない無生物ではないか。たとえば、その美しい金髪の首を盗んで見たところで、その五体を鉄路に横たえてバラバラにして見たところで、或あるいはまた、そのほかどんな方法で、その体をさいなんで見たところで、命を持たぬ無生物を、殺すなどということが出来ようはずはない。精々、傷つける——ということしか出来ないのだと、至

極理詰な論旨を展開されるであろう。

御説はまことに御もつともだと申しあげるほかはない。その意味では、この事件の途中で一般に流布された『人形殺人事件』という名称の方が、はるかに直截簡明に、事件の内容を表現しているかも知れない。

だが、私は敢て、奇異を好むといわれることも覚悟の上で、この題名を選んだのだ。その理由は、いずれ、この物語が進行して行くにしたがつて、読者諸君にもおわかりになるだろうと思われるから、ここではごく簡単に、前口上の解説を述べるにとどめておこう。

文明というものの洗礼を、未だに受けていない原始民族の間では、人形は、決して単なる美術品でもなく、単なる愛玩物でもない。彼等是一个の信仰の対象として、或は呪術の対象として、人形を作り、愛し尊び、それを祭っているのである。彼等にとって、人形は、人間の手によって作られた作品でありながら、しかも一つの魂を持つ別世界の生物であるかのように考えられている。ある場合には、人形は人間に幸福をもたらす神の身がわりなのだ。また、ある場合には、何かの魔法で、その眠れる魂をよびおこされれば、人間と同じように動きまわり、話し、泣き、笑い、時には愛の言葉さえささやく生物と思われているのである。

こうした見地から生れた、民話伝説の数もかぎりはなく、また、たとえば『ペトルーシユカ』のように、その幻想が、最高の芸術作品となってあらわれたものも決して珍しいとはいえない。

また、ある場合には、人形はその持主に対する護符とも思われていた。人間の身に襲いかかっ

て来るはずの災厄を、まずその一身にひきうけて、持主の身がわりとなる儀だとも考えられていた。

だから、原始人にとっては、その守護神ともいうべき人形が万一傷ついたときの心痛は大変なものなのだ。今日この人形に訪れて来た苛酷な運命は、明日は新たな形をとって、自分自身にふりかかってくるのではないかと恐れ戦いて、悪魔攘伏、怨霊退散の祈禱を捧げないうちは、安閑として眠ることも出来ないくらいである。

いや、そのような種類の信仰は、必ずしも、原始民族の間にばかり見られる現象だとはきまっていけない。たとえば、わが国の例をひいても、江戸時代——いや片田舎では明治大正のころまでも、『丑の刻参り』の風習が根強く残っていたではないか。

自分の恋をふみにじられた女が、生ける悪鬼と化し、髪をおどろにふり乱し、頭の上の鉄輪に三本の蠟燭をともし、恋仇と裏切った男になぞらえた藁人形を釘で打つ——深夜、その魂を失ったような白衣の姿を見たならば、と想像しただけでも、私などにはそれだけでもう鬼気迫るような思いがする。

また、子供たちの間には、今でも照る照る坊主の習慣が、むかしの形をそのままに伝えられている。人形をつくり、明日雨がふらないようにと祈願して、

「照る照る坊主 照る坊主

明日天気にしておくれ

それでも曇って泣いてたら

そなたの首をちょいと切るぞ」

とあどけない声で歌う、子供たちの姿には思わずわれわれの微笑をさそうようなほほえましいものがあるとしても、こうした子供たちの風習は、ある意味では、原始人の風習をそのまま鏡にうつしたようなものなのだ。

心理学者の説に従えば、どんなに文明が進歩しても、人間の心理の奥底に宿っている原始的な感情は、どうにも動かせないものだということである。たとえば、われわれが悪夢の中で、蛇へビに追われて冷汗を流すようなことがあるのは、何十代何百代か祖先の経験と感覚が突如として自分の意識の中によりみがえって来たためだといわれている。そうした、原始的な感覚、古代人的本能をよびおこされたとき、人は平素自分の周囲をとりまいていいる環境と、あまりにも隔絶した事の動きにしばし呆然ぼうぜんとし、雷電のような恐怖にうたれずにはおられないのだ。

たしかに、この事件の犯人の心には、こうした神秘的な感覚が、多分にひそんでいたのではあるまいか。人の誰しも持ちあわせている、原始的な恐怖心をよびおこすことにかけては、彼は天才的な手腕に恵まれていたのではあるまいか。

この犯人は、人形を殺すときには、まことに至難の業と思われるような冒険を敢てしたのだ。それでいて、当の人間を殺すときには、実に無造作に、まるで鼻歌まじりのような調子でやってのけたのである。

この事件に、何ともいえない不可解な雰囲気^{ふんいき}がみなぎっていたのは、一にかかってこの倒錯現象のためだったといえるであろう。

原始民族の祖先の感情を、まざまざと心に呼び起された人々は、恐れ、戦き、迷ったのだ。どうして、この犯人はこれほど人形というものに、気ちがいじみた執念を持っているのだろうか？

或は原始民族の魔術師たちのように、人形さえ殺してかかったなら人間はほっておいても命を失うという、病的な信念にとりつかれているのかと不思議に思わずにはおられなかったのである。

かくいう私自身もまた、その妄想^{もうそう}の虜^{とりこ}となった一人であった。この事件のすべての謎^{なぞ}がとき明され、その真相が白日の下にあばき出された今日でも、その時の盲目的な恐怖の感情は、まだ消えやらずに残っている。その印象が、あまりにも強烈なものであったればこそ、私は何度か思いあまったあげく、この題名を選ばずにはおられなかったのである。

ただ「人形を殺す」という言葉を、今まで述べて来たような見地から、素直にうけとっていただけのならば、この題名も決してこけおどかしのものではない。

この人形殺人事件の犯人は、断じて伊達^{だて}や酔狂で、人形を殺して行っただけではないのである。そこには実に緻密^{ちみつ}な、実に巧妙な、魔術的な計算さえ働いておったのだ。その人形殺しの意味を見やぶることに、この事件全体の秘密をとく鍵^{かぎ}がかくされていたのである。

その意味で、この題名はそのまま、本格推理小説の立場からする、読者諸君への挑戦^{ちようせん}の言葉とうけとっていただきたい。

筆者の投げる手袋は、
「人形はなぜ殺される？」

第一幕 断頭台の女王

1 魔術への招待

新宿駅の東口を出て、スケートリンクのある方へ二百メートルほど行ったあたりに、『ガラスの塔』という名前の、一種異風な喫茶店がある。

この名前だけ聞いたのでは、誰でも、壁全体をガラスばりにした、近代的な採光のよい明るい感じの店を想像するだろう。しかし、実際その前に立って見るとこの店から受ける印象は、全くそんな予想とはちがっている。

化粧煉瓦^{れんが}をつみあげた壁は、まるで苔^{こけ}でもむしているようにくすんだ色だし、窓も、まるで刑務所の監房の窓のように、ほんの明りとり程度の大きさしかない。ただ鉄の格子が、あるかないかの違いだけなのだ。

もっとも、こんな外観は、この附近一帯の雑然とした、何となく薄暗い影を持つ街全体の雰囲気と、たくまずして調和しているのだが、一步この店の中へ足をふみいれると、そこには更に異国的な、更に珍しい光景が展開されるのだ。

全体が暗く、穴蔵のような感じをうけるのはまだしも、壁にかけられた額の絵は、すべて風変わりなものなのだ。これが、ピカソやマチス流の、上下さえはつきりしないような絵ならば、この

頃では敢て風変わりともいえないが、黒く陰鬱な銅版画、そしてその絵の題材も、まるで西洋中世紀の魔術本の挿絵を切りぬいて来たような奇怪きわまるものばかり。

腸詰みたいな鼻を持つ妖婆とか、大きな三日月形の刃のある首斬鎌を持った悪魔だとか、三本足の矮人だとか、悪魔会議の光景を写しとったような場面がこの壁のいたるところに見出される。そしてその他の装飾も、印度の蛇使いの吹くような笛、人の形のようにひねくれて成長した木の根、アラビアン・ナイトに出て来るような古びた青銅製のランプなど、すべて異様な雰囲気、その周囲にただよわせるものばかりなのである。

だが、その中でも、もっとぶきみな、最も不可解な存在は、その中央のアルコーブの中に、飾られてある陰惨な置物なのだった。

大きなガラスのケースの中に、また二重に一尺ぐらいの高さの四面ガラスの塔らしいものが入っている。しかも、その内側の塔の中には、六寸ぐらいの大きさの人形が、逆さに天井からぶら下げられているのである。足をしばられ、手には手錠をはめられて——その無表情な顔も、この無惨な拷問にたえかねて、真赤に充血し、眼も宙にとび出さんばかりに苦悶しているように思われる。

この凄惨きわまりないガラスの塔——これがこの店の名前の起りなのだ。

探偵作家の松下研三は、酒友の青柳八段といっしょに、一度この店に足をふみこんでから、その何ともいえない怪奇な雰囲気がすっかり気に入ってしまった。そして、ある日の夕方、この店

のマスターを呼んで、自分の名刺を出し、この飾物のいわれを教えてくださいとたのんだことがある。

「松下研三先生……ああ、もと捜査一課長をしておられた松下英一郎さんの弟さんで、探偵小説を書いておられる……お名前はかねがねうかがっておりましたよ」

主人は丁寧な口調でいって、研三のむかひの椅子いすに腰をおろした。なかなか整った端正な容貌だが、研三は一本残らず雪のように光っている髪の毛の工合から判断して、相手の年を六十に近いとにらんだ。ところが、後で実際の年齢をきいたときには、驚いてしまって、なかなか信用も出来なかったくらいである。この男はまだ四十五——彼とは、十しか年がちがわないのだ……

「私は中谷譲次と申します。むこうでは、ジョージ・中谷といわれていました。メリケンくさい名前でしょう？ 戦争のおかげで送還されて、こうして今では、しがなない喫茶店のマスターにおさまっています。それまでは、むこうでも、歴史に残る大魔術師、フリーディニエの再来といわれたこともあるのです」

中谷譲次の言葉には、追い求めても帰ることのない青春をなつかしむような調子があった。

「先生のような探偵小説の世界でもそうでしょうが、魔術の世界もきびしいものです。魔術師というものはたえず自分の体と頭を、鋼はがねのように鍛え上げていなければならないのです。たえず新しいトリックで、お客を喜ばせなければならぬのです。普通の人間なら、何でもなし、ちょっとした体の故障でも、魔術師の場合はたちまち命とりなのです。たとえば、いま申しあげた大フリーディニエが、手錠をかけ、錠をおろした鉄の箱に入り、氷のはったハドソン河の河底に投げ

こまれたことがあります。五分、十分……三十分、フリーディニエの姿はあらわれません。最初はかたずをのんで待っていた見物人たちも、さわぎ出しました。気の早い新聞などは、大フリーディニエ遂に死す——という記事をのせたくらいです。ところが何ということでしょう。フリーディニエは、二時間後に、氷の割目の間からばかりと顔を出したのですよ。手錠をはずし、鉄の箱から脱出することはともかく、二時間のあいだ、氷のはった水中で、どうして呼吸をしていたか——とても人間業とは思えません」

「全く、鰓えらでも持っていないかぎりには、想像も出来ないことですね」

「私はフリーディニエのやったことは、自分でも残らずやって見ました。ここに飾ってある品物は、たいていその時代の名残りの品なごです。といって、最初にレールを敷く人間は、その上に列車を走らせる人間より、はるかに大きな仕事をしているわけです。だから、かりに私が、フリーディニエと同じことが出来たというだけでは、彼をしのいだ——ということにはなりません。ただ一つ、私の自慢出来ることがあるとすれば、それはこのガラスの塔の魔術をやったことですよ」

おりもおり、片隅かたすみのオーディオは、「幻想交響楽」のぶきみな第四楽章、「断頭台への行進」をかなではじめた。この白髪の魔術師が、力をこめて、ガラスの塔を指さしたとき、その中でさかさに宙づりになっている人形は、かすかな悲鳴をあげたように思われた。

「ガラスの塔——とは、いったいどんな魔術なのです？」